

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 24 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：5月28日（火）【1日目】

大学名：清華大学

氏 名：鄧佳怡

日本に到着したのは深夜 12 時過ぎで、深夜の関西空港には私たちの便の乗客以外にはほとんど人がいなかった。整然としたレイアウト、そろった色調は私の関西空港への第一印象であった。入国審査を待つ際、ホール内の柱に手続きの内容を知らせるポスターが貼られていたのを見かけた。ポスターには明るい色調のアニメ風の動物が不器用ながらも可愛らしく各手続きを行う様子が描かれていて、それはひっそりとした深夜でありながらも思わず人を楽しませるものであった。しかし、入国検査の際、ある職員が少しいらいらし始めた。と言うのも、日本人用の通路が空いていて外国人用の通路が私たちの団体により長蛇の列となっていたため、日本人用の通路を開放することになったが、私たちはおしゃべりに夢中になり職員の指示を聞いていなかった。そのため、職員の態度が多少きつくなったのである。これに私は、日本社会は常に良好な秩序を保っているが、疲れた深夜、特に他人が自分の意図を理解してくれない時や苦勞が報われない時には恐らく多少堪えきれない時もあるのだろうと感じた。これには私は尚のこと、これから先の活動では他人の善意に対してしっかり向き合い、「他人に迷惑をかけない」という日本の考え方を守らなければならないと思った。なぜならこれが日本の国民が数百年間互いを尊敬しあい、他人を口汚く罵ることが極めて少ないことの秘訣かもしれないからである。理解とは互いのものであり、愛もまた然りである。もし互いの愛や理解を日本と中国の両国関係に波及させることができれば、長きに渡るわだかまりもなくなると思う。

その後、私たちは預入荷物の受け取り場に移動し、そこでは二人の職員がすでに皆の荷物をきれいに並べていた。さらに自分の荷物を取り間違えないようにとの注意喚起のプラカードを手にしていて。そして私たちが荷物を受け取り列に並ぶと、彼らはまた疲れた身体で再び後続の荷物の整頓を始めた。その様子は、いつ何時でもその小さな管轄スペースを守るかのようで、常に整然としていて、それはまた彼らの勤務態度を象徴していた。仕事自体は単純でまた繰り返し作業かもしれないが、彼らは常に真面目でひたむきさが感じられた。こうした勤務態度はとても貴重なものであり、中国のサービス業ではこうした職員の姿を見かけることはほとんどない。

そしてバスが大阪から京都に向けて走り出した。深夜のアリソンホテル京都十条のスタッフの笑顔、お母さんのような中島さんの態度は、今回の日本での旅が温かく楽しいものになることを示していた。

日 付：5月28日（火）【1日目】

大学名：国際関係学院

氏 名：孫帥

この日本来 14 時 25 分に出発予定だった便が天候の理由で 21 時頃ようやく出発した。だが、すでに機内において私は日本文化がもたらす独特の体験をすることができた。

まずは日本版の機内安全設備の紹介ビデオで、これは日本の歌舞伎をテーマにしたもので、日本文化を PR すると同時に乗客の興味を引き、さらに乗客への安全事項の喚起という役割も果たしていた。私はこうした点が中国として未だ不十分であり、日本に学ぶべきだと思った。

またこの問題について深く考えた場合、実際のところは日中両国のソフトパワーの違いであり、中国としてはこの問題にしっかりと向き合い、早期にソフトパワー面で成果を挙げるべく学び続けると同時に自らのイノベーション能力を育む必要がある。

次に空港職員の態度である。28日の午後から29日の未明にかけての私たちの体験や観察から、中国と日本の空港職員の態度には大きな違いがあることがわかった。私たちが入国審査を終えたのはすでに2日目の深夜1時頃であったが、日本の空港職員は常に笑顔で業務を行っていた。これは私の予想を上回るものであったが、それと同時にまたある意味では理に適ったものであった。

最後にバスの運転手である。私たちが運転手のもとに荷物を運んで行った際、運転手は私たちへの感謝を口にしていた。だが中国では荷物は乗客自らが車に積み込む。この三つの点から、私は確かに中国と日本には差が存在し、特に日本に学ぶという点について私たちは未だ不十分だと感じた。

日付：5月29日（水）【2日目】

大学名： 清華大学

氏名： 胡鈺彬

積水ハウス—緻密さと思いやり。

積水ハウスでは同社のデザインの実例を見学し、デザイン体験を行った。四階建ての建物では、毎年約30万円近くの暖房用電気料金を5万円に引き下げる、一つの家屋における電気購入量をわずか780kwhにする設計、三階では日本の最先端のシステムバスといった積水ハウスの環境保全に対する思想や実際の貢献についての紹介があった。日本には統一の基準があり、建造時に適度なスペースを残すことで特定サイズのシステムバスの取付が可能で、優れた防水機能を果たしている。この他、同社は様々な人の行動モデルを調査し、その調査結果を基準化しそれぞれの人に適した家具デザインを実現し、さらにフィードバックに積極的に耳を傾けている。こうしたプロセスには緻密さと思いやりが示されている。

和風の昼食—熱いお茶と小さな鍋料理に救われた。

この鴨川傍にある日本料理屋にはきれいな庭園そして豊富な料理があり、さらに鈴をつけて動き回る料理運搬用ロボットもあった。ここで私は初めて日本のお茶を飲んだが、冷たかったため身の毛がよだった。ここではほかほかの鍋料理が救いとなった。

京都大学—時計台に登る勇気のある同年代の人間。

京都大学では、韓立友先生から京都と京都大学の特徴についての紹介があった。東京の権利追求、大阪の利益追求とは異なり、京都は貴族のようであり何も求めず自ら価値があると思うことだけを行う。こうした気風は京都大学に反映され、「自由の学風とイノベーションの精神」を形成している。京都大学は政府の干渉を受けず、絶対的な学術と言論の自由を有している。政府もしくは学校に何らかの不満がある度に、学生らは宿舎から梯子を持ち出し5階分の高さのある時計台に登り自らのスローガンや横断幕を高々と掲げ、自身の主張やスローガンを宣伝し自由を守るのである。これに対して警察や政府はどうすることもできない。京都大学の学生らの博学さや友好的な姿勢はとても印象深かった。

日付：5月29日（水）【2日目】

大学名： 中国人民大学

氏名： 楊昊翰

たとえ飛行機の遅れで4時間しか寝ていなくてもこの日私は早々と目が覚めた。と言うのも、日本を訪れたという興奮から一分一秒も無駄にしたいくないという気持ちだったからである。

この日の午前には積水ハウスの納得工房を見学した。この親切な従業員、さらに周囲の落ち着いた静かな環境、室内の整然さに私は同社への尊敬の念を覚えた。またそれ以上に同社の人間本位の設計理念は各所のレイアウトに独創的な工夫をもたらしており、より良い、より快適な居住環境の創造のための心配りに満ちていた。谷口女史の引率の

下、私たちは各デザインの実例展示を見学し、実際にその独特な設計理念を体験した。三階のリビングとレストランの照明に関連するレイアウトや組み合わせでは、明かりを二つの動態の有機的部分としてインテリアデザインに融合させたより快適な居住環境の構築の展示がされていた。次にキッチンにおける三つのデザインで、一つめは灯火同士の連携に重きを置き、二つめはコンパクトさに重きを置き、移動する壁によって空間を最大限に利用し、三つめは自然との連携に重きを置き、家屋と自然との中間地帯を構築していた。その後、私たちはさらに夏冬の季節における室内での省エネ設計を見学した。それは効果的な設計により夏における熱量の進入と冬における熱量の拡散を減らし、空気の流れを保証するという窓への設計であった。最後に私たちは高齢者・幼児・病人・障害者向けの室内デザインを見学し、さらに器具を身につけ高齢者の歩行の不便さを体験した他、同社の幅広い設計理念を体験した。これらの体験から、同社の設計は常に進歩を続け、子どもから高齢者まで各年齢層の需要を踏まえ、且つ各年齢層に浸透させるなど並大抵ではない苦心をしていることが分かった。

お昼に私たちは二条苑で純和風の昼食を堪能し、裏手にある日本庭園を散策した。京都大学への訪問はこの日の活動における重要ポイントであった。まず初めに韓立友准教授から日本トップクラスの学校である京都大学についての紹介があった。特に印象深かったのは、教授らの給与は十分で、論文数の影響を受けない、行政的に政府とは独立していて学生らは独立して自由に活動に参加でき、さらには校長への反対を示す活動を組織するまたはそれらの活動に参加することができる、吉田寮は学生自治の大本営であるといった京都大学の学術の自由、独立の精神の学風であった。その後、私たちは日本人学生や留学生と東アジアの環境問題について討論を行った。そして懇親会では副学長また各役員からのお話があり、私はその席上可愛らしい女子学生とシャイな男子学生と知り合うことができた。そして最後に私たちは記念に集合写真を撮った。

日 付： 5月29日（水）【2日目】

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 申李潔

今日の午前に見学した積水ハウス総合住宅研究所はとても印象深かった。まずはエントランスに入っただ目にした積水の塔である。山の中腹での貯水という知恵、会社が継続してきた努力のいずれもが同社の企業文化を伝えている。同研究所が目指す人間本位、思いやり至上の理念は、見学時にスリッパを履き、生活におけるリアリティに最大限近づける、畳式のオープンキッチンにより家庭内の交流をより便利にするなど、需要からすべての設計を行う、細やかな思いやりや高齢者、妊婦用に特別な設計をすることで部屋をすべての人にとって住みやすいものとする、など様々な部分に現れている。そして企業の環境に対する社会的責任感、省エネ排出削減、環境の緑化等、企業全体がその強いヒューマンケアや高度な責任意識を示している。

昼食の懐石料理はとても上品でおいしく、日本文化の特色を体験できた。窓の外の日本庭園は優美そして静かで食後の散策にぴったりの場所であった。

午後の京都大学での交流では大学の神髄が感じられた。独立の精神、自由の理想、これらは100年前の五・四運動と図らずも一致しており感じるどころが多かった。この他、学術に専念し世の中の事に気を使うことなく、科学の頂点を極め人類に幸福をもたらすとの信念にも感服させられた。よってその後の交流における日本人学生との意見交換もより貴重なものとなり、こうして生まれた友情もまたとても貴重な収穫となった。

日 付： 5月29日（水）【2日目】

大学名： 国際関係学院

氏 名： 陳錦儀

今日見学した積水ハウス総合住宅研究所はとてもきれいであたたかく、家のような感じがして、敷地内には会社の

精神を象徴する積水の塔が聳えていた。同研究所の設立理念は試着のように自分の好きな家を試すことができるというものである。私たちはまず和式キッチン、Kitchenless Kitchen、Natural Kitchen の3種類のキッチンを見学した。私個人的には、スペースを節約し、いろりや冷蔵庫、操作台を三角形の区域に設計し二歩で各区域に到達することができる Kitchenless Kitchen が好きである。次いで、私たちは窓について学び、窓を通じてでも省エネや夏冬の室内の快適な温度調節が可能なることを知った。それから照明設備を見学した。そこでは、日常の光や太陽光は上から下に来るため人々はそうした固定観念があるが、実は光が上から当てられるのと下から当てられるのでは全く違うことを知った。最後に私たちは障害者や高齢者用の住宅を見学し、器具を借りて彼らの日常生活における不便さを体験した。今回の企業見学で印象深かった二つの点、その一つめはディテールへの重視で、私が普段気にかけない点（光の方向など）についても実は多くのこだわりがあり、室内デザインにおいても多く応用されていた。二つめはヒューマンケアで、個人的に何気ないと思う場所でも実は高齢者や障害者にとっては困難が付きまとうものであった。

午後、私たちは京都大学の学生と交流を行った。そこで私は初めて京都大学は国旗や国歌のない大学で、学術的雰囲気非常に自由であることを知った。京都大学の学生はまたとても真面目で賢く、私たちのグループの討論テーマは仕事と生活のバランスを如何にとるかというものであったが、彼らは非常に明確な論理が示されたPPTを作成するなど多くの準備を行っていた。最後に私と同グループの日本人男子学生が皆の前で発表を行った。私は他のグループの発表内容を聞いて、皆の言語レベルはとても高く、私をもっと頑張らなければと思った。

日付：5月30日（木）【3日目】

大学名：清華大学

氏名：鄧佳怡

高台寺での座禅の際の住職について私はとてもユニークな人だと思った。住職からは、十段階の呼吸法は男性に向いている。その理由は、男性は常に女性を待つ立場にあり、待つ際にこの呼吸法を活用することで男性は心が穏やかになり、遅れてやってくる女性に男性の愛を感じさせることができるからである、とのお話があり、あまりに生活に密着した共感が得られやすいこうした内容に、その場は大いに沸いた。また住職の背後には書の掛け軸が飾られており、書かれている内容のおおよその意味は「徳のない人に対して、徳のある人は責めてはならず、手助けをしなければならぬ」というもので、この言葉もまた日本文化の神髄だと言える。

茶道もまた非常に有意義な礼儀であり、すべての繁雑な手順、厳しい所作への要求も最後には煩わしさが全くないことに気が付き、繁雑な中には極限の簡潔さが存在し、各所作には非常に工夫が凝らされていた。これもまた日本の設計における特徴を示していた。また茶道の茶碗における正面と反対側の区別、茶碗を回す所作もまた主人と客人との間の尊重を示すもので、日本人の礼儀への重視について感じる事ができた。

嵐山で周恩来詩碑を見た時には同時にタイムスリップしたような感覚になった。国の情勢が不安定だった当時、国を救う道は暗く入り組み、また人を尻込みさせるものだったが、雨中の嵐山は依然として緑滴り、それは暗闇から一つの光明を見出させるものであった。これは日本人にとっての自然の意味であり、自然はすべての希望を内包している。

新幹線で小田原に向かう際、私は人目を引かない多くのディテールを目にした。例えば各車両の入り口脇の手すりには点字があり車両の番号を示していた。また各座席の背の部分においては中国の列車で見かける「逸品ぞろい」の広告は見かけず、安全に関する注意事項の説明のみがあった。これこそ人間本位の設計だと思う。

箱根温泉の天成園に到着し、私は露天温泉の景色に驚かされた。何も纏わず温泉に浸かり、そこからは周囲の連なる山々、奥深い峡谷、小川などが一望でき、その瞬間、人は盤古が天地を創造した原点に戻り、一切の付属の物を下ろし、また付属の気持ちを忘れ、天地の懐に帰るようであった。

日付：5月30日（木）【3日目】

大学名：北京第二外国語学院

氏名：陳雪

またも早起きの一日だった。朝食は変わらずとても豪勢で、昼食後にバスに乗ったが、今回は企業や学校ではなく、大自然へと向かった。

高台寺では住職から仏教及び神道についての解説があった。住職からは中国の文化は日本においてしっかりと伝承されているというお話があったが、逆に私たち自身も多くの不十分なところがあることを認識すべきだと思った。わずか一時間の時間において私たちはさらに呼吸法を学んだ。気を丹田に集め、より多くの気力を呼吸に使い座禅をする。座禅の際その場は静寂に包まれ、皆は静かにこうした素晴らしいひと時を楽しんでいた。

座禅が終わった後、私たちは徒歩で近くにある茶室を訪れた。私たちに茶道の紹介をしてくれたのは熟練の優しい先生であった。彼女はまず茶をたてる手順について詳しく説明してくれて、それから茶の飲み方を教えてくれた。手順は多少複雑だったが、二回その手順を目にして大体の手順は覚えることができた。茶を飲む際には、先生の所作一つひとつには大自然や生命への愛と思いが示され、私もまたこうした素晴らしい茶を飲むことができ、さらにこうした美しい場所で生活できることへの有り難みを感じた。実際、生活においては至る所に感謝すべき点が存在している。

茶を愉しんだ後、周恩来総理が嵐山を訪れた際に残した詩碑の見学に向かった。私たちは詩碑の前で周総理がここで詠んだ『雨中嵐山』を朗読し、その際心の中は懐かしさと感動で一杯になった。周総理は日本での留学後に祖国に戻り、祖国の繁栄の手助けをした。周総理自身も恐らく過去を振り返った際に日本での経験について感謝をするであろう。

午後は新幹線で小田原に向かった。出発時に駅に到着した際はとても感激した。と言うのも、これまで本で見たり、耳にしたり、学んだものが実際に目の前に現れたからである。今回の旅は本当に来た甲斐があった。小田原に到着後はバス移動となり、楽しみにしていた箱根に向かった。ホテルでチェックインを済ませた後はきれいな浴衣に着替え、楽しみにしていた温泉に浸かり、さらに宴会場では私たちの懇親会が始まった。懇親会では各大学が舞台上で出し物を披露し、その場はとても盛り上がった。そして音楽が流れる中、宴会もクライマックスとなり、私たちは互いの出会いと友情に乾杯をした。

今日はスケジュールが詰まっていたが、訪れた先々、またそれぞれの環境特有の雰囲気はとても素晴らしく、私自身心の中で常に今回の訪日の機会そして出会いに感謝していた。

日付：5月30日(木)【3日目】

大学名：北京建築大学

氏名：孟昭昕

今日の活動は高台寺での座禅・茶道体験、嵐山の見学、新幹線での小田原への移動と箱根温泉体験である。

座禅の際、住職は私たちに「一期一会」という言葉について教えてくれた。これは今この時を大切にしなければならないことを伝えるもので、時間は戻ることはないため尚のこと大切にしなければならないという意味である。その後の茶道体験では、中国と日本の茶道の違いについて知った。茶道の手本を示してくれた先生の解説はとても分かりやすかった。日本の抹茶は少し苦く、また中国の茶のように何度も淹れることはできず、一度しか淹れることができない。

その後、周恩来総理の詩碑を見学したが、周総理についてまず思い起こされるのは、彼の「中華の決起のために学ぶ」という言葉である。周総理は若かりし頃、国を救う道を見つけるため日本を訪れ、雨中嵐山の詩を詠んだ。詩碑には複雑な図案などはなく、その素朴さは親しみやすいと同時にその思いの偉大さが内包されていた。

新幹線については中国の高速鉄道と似ていると感じたが、新幹線の駅での停車時間は中国よりも短かった。これは恐らく時間厳守と他人に迷惑をかけないという日本文化と関わりがあるのだろう。結果として、その他の乗客を長い間待たせることはない。

温泉旅館での懇親会の際、私たちは随行の団長や先生方、日本側のスタッフにお酒をすすめ、この数日間の同行

や指導への感謝を伝えた。先生方からは私たち中国の大学生への期待と共に日本で収穫が得られること、そして楽しい時間を過ごせることを願っているとの言葉を頂いた。私たちはさらに浴衣を体験し、それぞれ異なる浴衣の模様は訪日団のメンバーたちをよりきれいに引き立てていた。この浴衣体験はとても目新しいものであった。日本での生活を直に体験し、個人的に日本に対してこれまで以上に様々な角度から知ることができた。

明日の活動を楽しみにしている。

日 付：5月31日（金）【4日目】

大学名： 中国人民大学

氏 名： 易楚妍

今日見学した日立製作所中央研究所は日本の歴史ある電気設備メーカーである。見学の際、日立の解説担当者からは同社の歴史やDNA検査器具、論理回路、超音波検査器具の機能や開発プロセスについて紹介があった。これまで多くの日立の従業員の努力により今日の揺るぎない同社が存在している。最も印象深かったのは論理回路の開発プロセスにおける研究者の辛抱強さや注意深さで、100本以上の電線をそれぞれ巻き付け相応の回路に接続することで、その後の高い計算能力を生み出している。

午後、私たちは一橋大学を訪れ同大学の学生と日本の大学入試制度の中国との違いについて討議及び交流をした。一橋大学のキャンパス建築はローマ様式を採用しており、古風な中にも緻密で優れた学風が感じられた。日本の入試制度は中国とほぼ同じではあるが、彼らが公費の国立大学に入学するための条件はとても厳しく、暮らしが比較的裕福な学生のみが高校時に補修授業を受けることができる。一方、一般的な家庭においては、学生の能力が特に優れていない場合、自身の努力だけでは国立大学への入学は難しく、また私立大学の学費は高額であるという非常に現実的な難題に向き合うことになる。対して中国の大学入試は、相対的にすべての学生に公平な競争の機会を与えている。

日 付：5月31日（金）【4日目】

大学名： 北京建築大学

氏 名： 鄒敏

今日は日立製作所中央研究所を見学し、同研究所が顕微鏡、半導体材料の研究開発から段階的に今日の顧客起点、技術革新、基礎探索を柱とする三大イノベーション戦略を掲げる総合研究所に発展してきたことを知った。その中で印象的だったのは、現在では当初の単独の学科や単独の技術による基礎探索もしくは「一単一」と呼ばれる研究とは異なっており、各プロジェクトの推進や進歩においては必然的に複数の学科や技術が融合している。そのため学生段階にある私たちにとっては、自身の専門知識をしっかりと学ぶ以外にもより幅広く接点を見つけなければならぬと言う点であり、もう一つは、当初であれ現在であれ、多くの研究は人類全体の発展と幸福のために行われていると言う点であった。この点については多くの中国企業や若者が気付いていない部分である。この他、昼食の際に私たちは同社の業務制度、業務要件等の状況について知ることができた。こうした交流の機会が得られたことをとても嬉しく思う。

午後の一橋大学での交流では、日本の高校生もまたとても厳しい受験勉強をしており、その緊張とプレッシャーは中国の学生に引けを取らないことを知った。また日本の大学生の休日の過ごし方は中国の学生とは大きく異なっていた。報告や直接の交流を通じて私は日本の学生の生活や学習の状況について大体の理解を得ることができた。日本のキャンパス環境は中国の大学とは異なり、雰囲気もまた異なる。今後日本に留学に来る機会があれば嬉しく思う。

懇親会ではとある先輩と交流を図った。ここ数日の活動が多かったためか、それらを完全には吸収することはできなかったが、いつか今回の充実した時間を思い起こし、改めてそれらを噛みしめ、再出発ができるであろう。

これまでずっとメールでホストファミリーとやりとりしていたが、明日には実際に彼らと会うことができる。とても楽しみにしている。

日 付： 5月31日（金）【4日目】

大学名： 国際関係学院

氏 名： 黄蘇

午前は二時間余りの移動の後、日立製作所中央研究所を訪れた。日立は世界に誉れ高い百年以上の歴史を有する企業で、世界規模での研究者は約五千人、中央研究所では四百名を超える最先端の研究者やスタッフが集まっている。私たちはまず日立最新の心臓等臓器の画像診断技術を見学した。その処理速度は従来のCT等を遥かに超えており、画像の解像度や彩度も大きく高まっている。同機械の開発者の詳細な紹介により、私たちは日立の技術の世界の医学における貢献に感動すると同時にまた感服した。日立の歴史についての紹介を聞く中で、私たちもまた「より良い世界の構築」、「顧客第一」といった企業の百年の歴史において一貫されてきた精神や信念についてより深い理解を得ることができた。その後私たちは中央研究所の業務環境の見学を行い、ここでまた驚かされた。メインの建物の傍には芝生が敷かれ、芝生の上にはテントを作っている人がいて、さらにパソコンやゲームで遊んでいる人がいた。また同研究所の敷地はとても広く、敷地内にはスタッフの休息や娯楽用に大きな公園が設置されていたが、それは迷子になるのではないかと思うほど大きなものであった。また彼らの勤務時間も固定されてはおらず、各人は自身の生活面の需要により8時間の勤務時間を調整することができる。こうした差別化した制度設計もまた各研究者の積極性や創造性をある程度保障している。

午後、私たちは一橋大学を訪れキャンパスの紹介を受けると共に、間近で兼松講堂やグラウンド、レストラン、生協等の施設を見学した。その後は法学部の学生と気軽に楽しくグループ討論をし、共にプレゼンテーションの準備を行った。発表会はとてもリラックスした雰囲気、私たちとしても十分な交流ができたと感じた。その後の懇親会では数名の一橋大学の学生と知り合い、その中には一名長年中国語の勉強をしている学生もいた。もっと早くに知り合いたかったと思ったが、共に多くの中国文学についての話題で盛り上がり、お別れの時になっても物足りなさが残った。

日 付： 5月31日（金）【4日目】

大学名： 国際関係学院

氏 名： 戴泳豪

今日の朝はホテルを離れ、バスで二つめの訪問企業である日立製作所中央研究所に向かった。道中は一部の区間で太平洋を目にすることができた。見渡す限りの太平洋の大きさに衝撃を受けた。研究所に到着後、私たちはスタッフの引率の下、技術の紹介を受けたり敷地内の見学をしたりした。日立製作所については印象深い点が三つあった。一つめは企業の理念である。それは未来を展望し、勇敢に革新し、顧客と提携し、技術により美しい大自然を守るといったものであった。日立製作所の創立者である小平浪平氏は中国の古語「生年不満百、常懐千歳憂（生年百に満たざるに常に千歳の憂いを懐く）」を引用し未来を展望する理念を表し、技術により社会に幸福をもたらすとした。また馬場桑夫氏が打ち出した「己を空しうして唯孚誠を盡す」は顧客の視点に立つことが共同の革新における出発点であることを示しており、この点もまた重要である。二つめは外国人従業員、特に中国人がとても多いということである。研究者の代表の安部さんからは、彼自身かつて中国において中国の研究者と共に機械の研究を行ったことがあり、その際、中国の研究者は研究能力が高いだけでなく非常に熱心であったと感じ、さらに中国もまた革新における一つの出発点だと感じ、私たちが中国と日本をつなぐような人材になることを願っているとお話があった。三つめは情熱と辛抱強さであった。ある事情により同研究所での活動時間が15分ほど遅れてしまったため、彼らはわざわざ昼食の際にも面と向き合ってそれぞれ私たちからの質問に回答してくれた。本当に感謝している。

午後、私たちは一橋大学に向かい交流活動に参加した。まずスタッフと先生の引率の下、キャンパスを見学し、その後交流活動の会場に向かった。私たちのグループには三人の一橋大学の学生がいて、私たちは休みの過ごし方について語らうと共に発表用の原稿を作成した。その後私と日本人学生一人がグループを代表して発表を行った。多少緊張したが、幸い無事こなすことができた。発表の後は懇親会となり、その席上私は14年間中国語を学んでいる大学院生の男子学生と知り合った。彼の中国語の上手さに私はとても感動してしまった。私は彼に記念品を手渡すと、彼は小走りにビスケットを取りに行きお返しとして私にくれた。彼と知り合えて嬉しかった。

日付：6月1日（土）【5日目】

大学名：中国人民大学

氏名：劉瑩瑤

今日は私が最も楽しみにしていたホームステイの日である。私のホストファミリーはとても幸せな一家で、KahoとYanaという二人の可愛い女の子がいた。また井上さんと奥さんのいずれもが中国語を話せることにとっても驚いたが、後になって彼らは中国と深い縁があり、かつて中国で生活していてさらにいろいろな都市を訪れたことがあることを知った。私は彼ら一家の開放的で自由な雰囲気をとても気に入った。彼らは文化交流が好きで、多くの外国人の友人がいるだけでなく、これまで多くの国を訪れている。そして彼らは、文化交流は人間の視野や観点を広げ、見識の狭さを改善するものだと考えており、私も実際にその通りだと思っている。彼らはとてもフレンドリーでまた親切に私に明治神宮の歴史や日本の結婚の風習、誕生日の風習、天皇制等について紹介してくれた。そして百科全書のような彼らの知識に私は感服させられた。

ただ最も印象深かったのは彼らの教育方式であった。KahoとYanaは優しく聡明で多芸多才な女の子で、幼少期を中国で過ごしインターナショナルスクールで学んだ。井上さんと奥さんは、子どもが何か問題を起こした場合でも怒ったり責めたりすることなく、納得するまで丁寧に話し合いをしていた。また彼らは子どもが嫌いな事を強要することはなく、自身の長所や興味を見つけるように促し、それらを伸ばすことで子どもの長所としていた。これは子どもの成長に役立つ優れた教育方法だと私は思う。

この他、今日はホストマザーから日本のごみ分類制度や和食の作り方などを教わった。素晴らしい彼らに出会えたことにとっても感謝している。

日付：6月1日（土）【5日目】

大学名：中国人民大学

氏名：張悦洲

今日はホームステイの初日、私のホストファミリーは松原さん一家であった。松原さんの奥さんは以前全日空に勤めていて、現在ではホテルのアドバイザーやフードアナリストをしている。そして松原さんは伊藤忠に勤めている。彼らには結衣と弥衣という可愛い二人の娘さんがいる。長女の結衣さんの趣味はスキーで、週末の朝四時には松原さんは近郊のスキー場まで結衣さんを送り届ける。さらに毎年夏には結衣さんは、同時期には冬で雪のあるニュージーランドに20日間ほどスキーの練習のために滞在する。彼らの家にはまた可愛い茶色の猫もいる。

松原さんの奥さんは私を迎えに来た後、私が行きたかった浅草寺に連れて行ってしてくれた。浅草寺では賢くなるという香を嗅いだ。それから私が欲しかった桃鈴をあちこち探してくれた。その日はとても暑かったが、奥さんは嫌な顔一つせず、伝統文化の紹介や私の疑問への回答をしてくれた。

午後、私たちは明治神宮を訪れた。本殿前ではまず手や口を洗った。その際松原さんの奥さんは手拭き用にハンカチを差し出してくれた。私は彼女から参拝の方法を学んだが、中国の仏教とは大きく異なっていた。彼女曰く、新年の際には参拝のために何百メートルもの行列ができるとのことであった。帰宅前、彼女はまた100円ショップに連れて

行ってくれた。夕食には彼らが普段食べている物を食べたいと申し出ていたことから、その後私は彼女の娘さんと一緒に夕食の食材やスイーツなどを買いに行った。食事はとても美味しかった。

お風呂を済ませた後は結衣さんと一緒にゲームをして遊び、彼女の好きなタレントや中国の歴史について語り合った。こうして一日はあっという間に過ぎていった。

日 付：6月1日（土）【5日目】

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 馬伊彤

今日は本当に充実した一日であった。一日中ホストファミリーと一緒にいて、日本に対する印象がより明確になった。今日の朝、皆がホテルでホストファミリーの迎えを待つ時には緊張と不安で一杯だった。私のホストファミリーは若いご夫婦で、私は三番目に迎えてもらった。私たちはその後楽しい会話を交え、電車で渋谷や周辺の新宿、竹下通り、表参道などを見て回った。また彼らは私が洋服を買うのにも付き合ってくれた。昼食は和風のレストランで定食を三つ頼み、お互いにそれぞれの定食を食べるなどすぐに親しくなった。午後は中目黒や秋葉原に行き、秋葉原では日本の二次元文化を体感したが、別世界のようなようであった。そこではガチャガチャや女子高生が撮るようなプリクラを撮り、カードキャプターさくらの漫画や白夜行の原書を買った。笹原さん一家と共に一日半の時間を過ごせたことは私的にとても幸運なことであった。彼らは常に私の写真を撮ってくれたり、食事をごちそうしてくれたり、とてもよく私の面倒を見てくれた他、ひいては事前に地下鉄用の IC カードを準備するなど気配りが行き届き、とても親切に接してくれた。帰宅後、彼らが切ったフルーツを出してくれた時には、実家の両親も同じことをすることを思い出し、心が温かくなった。その後、自分たちで作った夕食を堪能し、東京タワーで夜景を見て、楽しかった一日が終わった。この日のカルチャーショックはとても大きなもので、日本に来てから最も印象深い一日であった。笹原さんご夫婦には言葉で表せないほど感謝している。

日 付：6月1日（土）【5日目】

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王誉欽

これまで多くの訪問や見学を行い、ついに私たちは一日半のホームステイの日を迎えた。皆はそわそわしながら待合室で座り、ホストファミリーが早く迎えに来てよりリアルな日本の家庭生活を体験させてくれるのを、首を長くして待っていた。他の団員らが一人ひとり出発していくのを見ながら、残された団員は出発した彼らへの嬉しさと同時に自分への焦りを感じ始めていた。ついに 10 時近くになって私のホストファミリーである菊入さんが笑顔で私を迎えに来た。こうしてホームステイが始まった。

日本の公共交通機関はとても便利であった。地下鉄駅に入るとすぐ菊入さんは私のために IC カードを作ってくれた。その際私はカードの料金を渡そうとしたが、彼女は笑いながら「私は仕事をしているけどあなたはまだ学生だから」と言って受け取らなかった。私はこれにとっても感動した。その後、菊入さんは私を東京大学の見学に連れて行ってくれた他、秋葉原では日本の火鍋料理を堪能し、最後に東京タワーに登った。そこからは東京が一望できた。その晩、ホストファミリーは私のために焼き肉を準備してくれていた。そして私たちは日本と中国の文化的共通点と相違点について紹介し合い、とても楽しい時間を過ごした。私たちは隣り合う二つの異なる国で生まれたが、互いに学ぶ中で相手側の文化を参考としており、食物、習慣、生活においては多くの共通した好みやルーツが存在する。菊入さんはまた、彼女自身は従来の日本女性のように結婚後に仕事を辞めることはしたくないと言っていたが、これにはまた前進を続ける日本社会の一面を見た気がする。これからも菊入さん一家との友情を保ち、日中友好に多少なりとも貢献をしていきたいと思う。

日 付： 6月2日（日）【6日目】

大学名： 清華大学

氏 名： 葛霄飛

昨晩は十分な休息が取れた。私とSANAはウキウキしながら地下鉄駅に向かい、その後東京駅を訪れた。東京駅の二階と三階はホテルとして利用されている。一階の両側の頂部は教会のようなアーチ型設計になっていた。

その後私たちは屋根なしの二階建てバスに乗り観光を始めた。皇居、日比谷公園、帝国劇場を通り、「名探偵コナン：漆黒の追跡者」においてヘリコプターで破壊された東京タワーに到着した。数年前から東京タワーはカラフルにライトアップされるようになり、ライトの色は季節と関係し、点灯や消灯の時間は天気や日出、日没の時間に関係している。

さらに私たちはとあるショッピングモールを訪れた。そこには各テレビ局の専門店があり、私は幼少期の自分を見た思いがした。それから私たちは日本のラーメンを食べた。中国のラーメンとは大きく違っていたが、とても美味しかった。

その夜ホテルに戻ってから、私は他の団員と鰻重を作るお店の見学をした。それから私たちはお台場に行き、海風に吹かれながら、その静けさと素晴らしさを体験した。

日 付： 6月2日（日）【6日目】

大学名： 中国人民大學

氏 名： 陳瑞齊

この日、松香さん一家は私を鎌倉に連れて行ってくれた。

私たちは鎌倉大仏や長谷寺を見学し、鎌倉市内を散策した。鎌倉大仏は1255年に建造され、その後数度の修繕を経て現在でも良い状態で管理されている。大仏全体は青銅で作られ、顔つきは優しく、唐の時代の仏像の風格があり、大仏のわずかに閉じられた両目からは13世紀の鎌倉にタイムスリップしたような感覚がした。日本の古跡への管理の素晴らしさには感服せざるを得なかった。

それから、松香さん一家から感じた日本人の文化について述べてみたい。日本の一部の年配の方からは、日本の若者は海外留学ひいては海外旅行すらも好まないといった、中国よりも国際化が不十分な点を心配しているとお話があったが、松香さん一家からは日本人の外国に対する非常に開放された、また包容力のある一面を目にした。松香さん一家はかつて中国の上海や広州で数年間生活していて、現在でも松香さんは頻繁に海外出張をしている。私的に最も感服したのは、松香さんの奥さんと二人のお子さんはすでに中国とはさほどの関係性がないにもかかわらず、中国語のレベルを維持するために毎週一度、中国語の先生を招いて勉強をしているという点であった。彼ら一家の国際的な視野についてはこの語学の件から見て取ることができた。

日 付： 6月2日（日）【6日目】

大学名： 北京建築大學

氏 名： 郭伊寧

今日の午前中は田中さんと浅草寺に行った。浅草寺は思っていた以上に壮観だった。日本の人々は宗教信仰にあつく、彼らは自身の行いやマナーを神が常に見ていると信じており、自らに制約を課しているようだった。

午後は国際関係学院の学生と原宿を散策した。原宿のおしゃれな雰囲気は日本国内のブランドのみならず世界の有名ブランドをも惹きつけていた。洋服から感じられる日本の伝統文化はお店の内装とも相まっていた。こうしたお店の理念と一致、また共鳴した感覚は本当に素晴らしかった。

日 付：6月2日（日）【6日目】

大学名：北京建築大学

氏 名：張堯

今日はホームステイの二日目、朝私は6歳の息子さんと一緒にゲームをして遊んだ。午後は「江戸東京たても園」を見学し、午後4時にホテルニューオータニに戻った。

朝食を済ませた後、私は6歳の息子さんとオセロをして遊んだ。オセロのルールは、二人がそれぞれ白と黒を代表し、交互に駒を置いていく。そして置いた駒が相手の駒を（縦、横、斜めに）挟んだ場合、相手側の挟まれた駒はすべて自分の側の色に変わる。そして毎回必ず駒の色を変えなければならず、色を変えられない場合は自分の番を1回飛ばして相手の番となる。そうしてすべてのマスが埋まった時点で誰の駒が多かったかで勝負が決まる。その後私はさらに「車庫出し」というゲームで遊んだ。そのルールは、決められた範囲内に異なる色と異なる方向の車を置き、車は向いた方向に沿って前進もしくは後退しかできない。そして絶えず移動させることで赤い車を決められた範囲から出すというものである。三つめのゲームは「12面体」で、この多面体は合計12個の頂点があり、さらにランダムで1から12の番号が付けられている。各面はいずれも正三角形で、各点は隣り合う五つの面の交点である。そして決められた正三角形のチップの各頂点には1から3の番号が付けられている。ルールはすべての正三角形のチップを多面体の各面に貼り付け、多面体の各頂点の番号を隣り合う五つの三角形の頂点の番号の合計と等しくするというものである。これら三つのゲームを通じ、私は日本の家庭では子どもが小さい頃にはこうしたユニークな知育ゲームにより子どもの思考を育てていることを知った。そしてこうした方法は子どもが自らすすんで行うもので、強制的なものではない。それは子どもの眼差しや真剣な態度から感じ取ることができた。

午後、私たちは「江戸東京たても園」を訪れた。この建築物はいずれも実際に存在していたもので、現在では火災、水害、干害、震災、戦禍による破壊からこれらの建築物を守るためにここに移され集中的に展示されている。私たちは主に三井八郎右衛門邸、吉野家、八王子千人同心組頭の家、田園調布の家、綱島家、前川国男邸等の建築物を見学した。それらの多くは木造で、釘のなかった時代においてはすべて込み栓といった継手により全体の枠組みが作られていた。その中でも最も驚いたのはこれらの耐震措置であり、いくつかには格子形の壁を内壁の位置に設置し、さらにわざと階層を持ち上げ、その周囲には木の柵を埋め、大きな石で土台を作っていた。

日 付：6月2日（日）【6日目】

大学名：国際関係学院

氏 名：張会

和室でよく眠り新たな一日を迎えた。今日の予定は海辺の散策とショッピングである。朝食を済ませた後、しげちゃんは私を海辺の散策に連れて行ってくれた。私たちはバイクで向かったため、私がヘルメットを被ったり脱いだりする毎にしげちゃんはそれを手伝ってくれた。海辺ではクラゲの大群を見かけたが、しげちゃんが言うには、夏が訪れ気温も高まったからとのことであった。その後私たちは港の文化館に相当する場所を訪れ、その最上階の展望室では中国の青島、連雲港等から贈られた記念品が展示されるなど、日中の経済交流の密接さを感じた。

その後は川崎市の歴史資料館を訪れ、川崎市の歴史的移り変わりについて理解を深めると共に、着物の試着もした。見学を終えた後は昼食となり、ラーメンを食べた。日本のラーメンの麺は中国のそれとは異なり、重曹が多く、よりコシがあった。

その後はショッピングをした。日本の一部のショッピングセンターは中国とほぼ同じ様式だが、ドラッグストアでは外国人観光客がやはりとても多かった。なおちゃんとおしゃべりにおいて、多くの中国人は日本の化粧品を好んでいて、日本人は比較的韓国の化粧品を買う傾向にあることを知ったが、これは私の予想とは異なるものであった。

一泊二日のホームステイでは日本人の日常生活を堪能すると同時に、彼らのライフスタイルを知ることができた。日本人は常に秩序だっていて、他人に対してとても礼儀正しいため、日本人との交流はとても心地良く、私が言葉に困

り辞書を引く際にも、しげちゃんやなおちゃんは私の話が終わるまでしっかり待っていてくれた。これまでの私の日本人への印象は礼儀正しいというものであったが、今回のホームステイでは日本国民のマナーや他人への思いやりというものについて実際に感じる事ができた。

日 付： 6月3日（月）【7日目】

大学名： 清華大学

氏 名： 文藝林

みずほ銀行

日本の三大金融機関の一つであり、また日本の全都道府県に支店を構える唯一の銀行である。

瑞穂は「みずみずしい稲の穂」を表す言葉で、実り豊かな国を意味する日本国の美称である。みずほ銀行は日本の7割の大企業と提携をし、また10万社の中小企業に向けて融資業務を行っており、さらに2400万の個人顧客を抱えている。同銀行での見学の際、私たちは、金融危機をどのように乗り越えたのか、モバイル決済の発展、失業率の問題の解決等について質問し銀行側からの回答を頂いた。

松本楼

梅屋庄吉氏と孫中山氏との深い関係、そして孫中山氏の革命事業への多大なサポートは、日中友好の模範である。

中国駐日大使館

中国大使館を訪れることは帰宅と同じである。中国大使館は中国の領土であり、私たちの国外における避難港である。日中関係を正しく認識し、友好関係を構築し、小異を残して大同を求めることは両国の発展に役立つと言える。

三井物産

すべての国や地域の顧客に必要なサービスやソリューションを提供しており、主に顧客に対して安定的な信用の保障を提供している。

日 付： 6月3日（月）【7日目】

大学名： 清華大学

氏 名： 李巖

今日のスケジュールはとても充実していて、計4ヵ所を訪問した。午前はずみずほ銀行を見学した。そこでは数名の中国人従業員が私たちと交流を図った。湯進博士からは、彼自身の日本人の仕事における特徴や日本の業務モデルについての見解と、それらの中国との比較についての紹介があった。その中で、中国式の個人を重視する「俠客」型競争に比べ、日本は集団を重視しており、これは彼らの企業の発展に対する道徳観や責任感とも関係があるとのお話があった。

お昼、私たちは日比谷松本楼で昼食をとった。建物内には当時宋慶齡女史が弾いたとされるピアノが展示されていた。食事の後、私たちは孫中山・梅屋庄吉両氏の状況を紹介するビデオを観賞した。梅屋庄吉氏は香港で孫中山氏と出会ってからすぐ、孫中山氏の革命事業を資金面でサポートすることを決めた。また孫中山氏と宋慶齡女史は松本楼で出会い、梅屋庄吉氏の妻である徳子女史の支援の下、様々な異論をはねのけ、めでたく結婚をした。「革命はいまだ成功しておらず、我々同志は引き続き努力しなければならない。」 私たちも今後努力を続け、日中関係を強化し、国をより良いものにしていきたいと思う。

その後、私たちは中国駐日大使館を訪れた。ここでは帰宅したような感覚がした。各大学の代表者からここ数日間の感想についての発表があり、張参事官からは日中関係の現状及び私たちは日中関係について如何に対応し、また如何に取り扱っていくべきかについてのお話があった。日中関係は現在、機会と課題に直面しており、私たちは歴史を忘れず、平和的発展の道を堅持し、隣国との友好的な交流により、経済・政治・文化交流を促進していかなければ

ばならない。

午後、私たちは三井物産を訪れた。三井物産は日本の総合商社であり、同社には工場はなく、商品の生産もしないが、貿易や市場調査に着眼しており、この点は彼らに事業における自由度を持たせ、さらに同社の柔軟な選択を可能にしている。

日 付： 6月3日（月）【7日目】

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 李澤茗

今日のスケジュールはとても充実していた。まず朝一番でみずほ銀行を見学した。中国国内ではかつてみずほ銀行の北京支店を見学したことがあり、その当時から同銀行に対して強い興味が生まれていた。今回の見学では、日中両国の企業の意思決定方法、業務内容、人材育成方法及び内部での構造転換等における違いについて知ることができ、さらに中国人従業員との討論も行った。至近距離で銀行やその運営モデルを目にすることはこれまでなかった経験で、私自身、機会が多く皆に平等なプラットフォームを提供するみずほ銀行のような企業に入りたいという思いが生まれた。それと同時に、情報収集の能力も非常に重要だと感じた。

その後は松本楼での昼食となった。食事の際には日中友好にまつわる梅屋庄吉氏と孫中山氏についてのお話を拝聴した。両氏は志を同じくし、初対面でたちまち打ち解け、同時に交わした約束はその後も変わらず守られた。そして孫中山氏と宋慶齡女史との愛情に関しても梅屋庄吉氏の妻である徳子女史の功績があった。松本楼は、二人の愛情の証人であるだけでなく、日中友好の象徴であり、私たち一行及びその他のここを訪れ梅屋庄吉・孫中山両氏の友情についてのお話を聞いた人は、正に日中の友好交流をその都度振り返り、こうした友好の旅を実践また継続し、さらに新たな日中友好の1ページを生み出している。

午後は大使館を訪れ、そこでは皆からここ数日間の感想についての発表があった。皆の発表を聞きながら、各自の思考のポイントの違いを感じ、改めてここ数日の出来事について自分なりに振り返ることができ、新たな感想が生まれた。参事官からのお話を通じて、私たちは日中の現在の友好がどれほど得難いものなのかについて知ることができた。私たちは現在の平和を大切に、さらに「国の交わりは民の親しきにあり、日中友好は結局のところ両国の人々の友好である」との言葉の通り、両国間の理解を深めなければならない。

その後はさらに三井物産を訪れた。三井物産は私が初めて目にした総合商社で、中国国内の中間業者に多少似ていると思ったが、三井物産の事業範囲は非常に幅広く、革新力もより優れていた。また、日中の貿易交流や観光に関する状況について知ることができ、従業員からはこうした状況を如何に改善するか、そしてこうした現象が生まれる原因についての回答を頂いた。その後の懇親会では私はさらに三井物産とみずほ銀行との違いについて理解を深めた。三井物産は中国式の雇用モデルに近く、さらに能力への要求が比較的高かった。一日で経営モデルが全く異なる二つの企業を見学できたことは、とても有意義であった。

今日は4ヵ所を巡り、とても疲れたが楽しかった。明日には帰国となる。企業訪問の旅は収穫が多く、これまで知らなかった金融面の知識や経営モデル等について学びそして目にすることができた。

日 付： 6月3日（月）【7日目】

大学名： 北京建築大学

氏 名： 梁慶慶

今日は日本訪問の7日目そして最終日の前日で、今日の私たちのスケジュールはとても充実していた。朝食を済ませた後、私たちはまずみずほ銀行を訪れた。みずほ銀行は日本の全都道府県に支店を構える唯一の銀行で、その規模の大きさがうかがえた。みずほ銀行は、2000年9月に第一勧業銀行、富士銀行、日本興業銀行が再編成されて

できた銀行で、多様化また高度化する顧客の要望を満たすことを目標とし、グループの垣根を越えて行き届いたサービスを提供している。みずほ銀行の「みずほ（瑞穂）」は「みずみずしい稲の穂」を表す言葉からきており、実り豊かな国を意味している。日本ではみずほ銀行のことを知らない人はいないと言えるが、海外での知名度はそれほど高いわけではない。その理由は、海外においては法人業務のみで個人業務を行っていないからだと思う。見学の際、銀行側は私たちにみずほ銀行のことをより良く知ってもらうため、4名の中国人従業員との交流を手配してくれた。

次いで、私たちは日比谷松本楼を訪れた。ここには日中友好における美談が存在している。孫中山氏と梅屋庄吉氏はここで関係を深め、「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す。」との決意により、梅屋氏は「中国をより良くする」との思いを胸に、その生涯において自身の大部分の財産を孫中山氏の革命事業に捧げた。これにはとても感動した。そしてこうしたお話を実際にしてくれたのは梅屋庄吉氏の曾孫の方であった。彼女は、両氏の友情には何の政治的目的もなく、当時は多くの人が孫中山氏の革命を支持していたが、梅屋庄吉氏は終始日中の友好と繁栄だけを目的としていた点を強調されていた。

その後、私たちは暫しの「帰宅」となる中国駐日大使館を訪れ、参事官からのお話を拝聴すると共にここ数日間の感想についての紹介と報告を行った。そして最後に三井物産を訪れた。三井物産の運営モデルは比較的特殊であった。同社は総合的な会社で、自身の実業を持たず、売買等の方式のみで運営をしている。もちろん現在では各種のインフラ、素材、金属、生活産業等への投資も行っている。こうしたモデルは日本独特のものであるため、皆はとても興味をひかれ、我先にと質問をしていた。その夜の懇親会では、同社の従業員とさらに踏み込んだ交流をし、同社の様々な提携モデルについて理解を深めるなど、皆は多くの収穫を得ることができた。

日 付：6月4日（火）【8日目】

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 鄒可馨

今朝はホテルニューオータニのエコ施設を見学した。そこは少し熱く、多少の嫌な臭いがあったことを除いては、とても素晴らしかった。ホテルニューオータニはとても強い社会的責任感がある企業で、生ごみを回収し有機肥料にしたり、厨房用水を回収処理しトイレの洗浄用にしたり、さらには発電までしていた。これらは炭素排出の削減に非常に大きい貢献をしている。

その後は歓送会に出席し、そこでは再び志村さんと会うことができた。彼女の無事の出産を願うと共に、赤ちゃんの写真も見られることを願っている。

先生方からのお話の際には、多くの人が涙していた。それは私も同様で、この一週間多くの優秀な方々に囲まれ、配慮や激励を受けてきた。私はこの一週間のことを胸に刻み、しっかりと学び、日中の友好交流の構築に貢献していきたいと思う。

日 付：6月4日（火）【8日目】

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王琪琦

この日記是北京に向かう飛行機の機内で書いている。

これが最終日で最後の日記だと思うと悲しさと名残惜しさを感じる。

今日の午前、私たちは宿泊先のホテルニューオータニでの学習と見学を行い、同ホテルの生ごみ処理、中水処理そして自家発電装置について理解を深めた。ホテルニューオータニの設備は整っており、緊急時に避難所となれるような場所だと私や団員らは皆驚かされた。その後、私たちはホテルニューオータニ内の自然豊かな日本庭園も見学した。

お昼は私たちの歓送会が開かれ、訪日団の歌「Auld Lang Syne」の合唱の際には私自身涙が堪えきれなかった。私に多くの物をもたらしたこの数日間において、私は多くを学び、視野もより大きくまたグローバルになり、そしてこれまで以上に包容力がついた。ここを離れるのがとても名残惜しかった。

今回の訪日の旅を支えてくれた多くの人への感謝の気持ちは言葉で表現ができないものである。

この数日間の旅は、驚きと喜びそして収穫に満ちたもので、とても感動させられた。これらは全て私の大切な思い出であり、これからずっと大切にしていきたいと思う。

将来いつの日か私自身も日中両国の架け橋となり、両国の平和や友好そして共同の発展のために貢献できることを願っている。

また会いましょう、日本！

日 付：6月4日（火）【8日目】

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：邵劍博

今日は訪日活動の最終日である。午前、私たちはホテルニューオータニの生態環境、ごみのリサイクル技術、中水処理技術を見学し、これらの技術にとっても驚かされた。中国は現在循環経済の発展段階にあるが、日本はこの分野においては世界でもトップクラスであり、技術や意識の育成等のいずれにおいても私たちが学ぶべき点があった。

見学の後、私たちは歓送会に参加した。歓送会にはホストファミリーや各企業の代表者等も参加し、この一週間の出来事を共有した。そしてこの時、私の心の中には感謝の二文字しかなかった。中日友好協会そして中国日本商会、日中経済協会等がこれほど中身の濃く有意義な活動を実施していること、学校側が私を今回の活動に参加させてくれたこと、横山さんや笹原さん、そして中島さんの今回の活動における同伴とお世話、ホストファミリーのおもてなし、団員の皆のサポートのいずれにも感謝している。それ以外にも感謝したい人はまだまだたくさんいる。それと同時に今回の活動では、自分自身に不足している沢山の部分を発見することができた。これから先私はさらに努力を重ね、自分を成長させ、より良い中国そしてより良い世界のために貢献をしていきたいと思う。

日 付：6月4日（火）【8日目】

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：楊璐珺

今日は「走近日企・感受日本」の最終日で、午後には帰国の途に就く。

午前、私たちは生ごみを有機肥料にする施設や廃水をトイレ用の中水にする装置及び給電・発電設備を含むホテルニューオータニのエコ施設を見学した。ホテルニューオータニは環境保護においてあらゆる配慮をしており、様々な点から貢献をしていた。

見学の後、私たちは宴会場でホストファミリーの到着を待ち、彼らとの歓送会を開催した。

そこではホストファミリーの田中さんと再会できとても嬉しかった他、思いがけずプレゼントとしてたくさんの村上春樹の本を受け取った。だが田中さんは、仕事の昼休みの時間を利用して歓送会に来ているため、早めに戻らなければならず、私たち団歌の歌唱を聴くことができないとのこと彼自身もとても残念がっていた。今回のホームステイにおいて田中さんは私を浅草、江戸・東京博物館、鎌倉等の場所へ連れて行ってきて、私は日本の歴史や文化について理解を深めることができた。田中さんのおもてなしにはとても感謝している。

歓送会終了後、私たちはホテルを離れ空港に向かうことになったが、私たちをもてなしてくれた日本の皆さんのお別れをする時になって初めて私はついに日本を離れることになるのだと感じ、心に名残惜しさがこみ上げてきた。これから先機会があったらまた日本を訪れたいと思う。

今回の訪日の旅を通じて、私は日本の企業文化、社会文化、キャンパス文化等を知る貴重な機会を得ることができた。こうした機会は通常の旅行もしくは留学では得られないものであるため、今回見聞きしたすべての事を大切にしていきたいと思う。

旅が終わり私の心の中には感謝で一杯であった。さようなら、日本！今回関わったすべての人に感謝しています！